

—従軍画家のスケッチブック—

小川原脩は1911年に倶知安で生まれ、その後19歳で東京美術学校へ進学、本格的に画家として歩み始めました。東京で活動が続いていた1930年代の終盤から戦時色が濃くなりはじめ、小川原も旧満州への出征、太平洋戦争が開戦し中国南西部への従軍と、複数回にわたって戦地へ赴きました。特に1944年には、陸軍報道部の従軍画家として戦争記録画制作の委嘱を受け、戦線を追うように激戦地に足を踏み入れます。小川原自身が後年〈戦争のリアリズム〉と表現したこれらのスケッチは、現在までに160点が確認されており、その大半が公開されたことはありませんでした。

2022年に実施された北海道立近代美術館との共同研究「北海道の美術・戦時下の動向について」の一環で調査が進められ、基礎的な情報がまとめられました。特に、従軍時に携えていた小型のスケッチブックを詳細に見ていくと、現地の暮らしの道具や、休息する兵士たちを捉えた素描も含まれています。本展ではその研究成果をもとに、貴重な戦地スケッチを公開します。



「戦地スケッチ B24 20機の爆撃を受く」 1944年



「戦地スケッチ(歩兵)」 1940-44年頃



「戦地スケッチ(飛行兵)」 1940-44年頃



「戦地スケッチ(歩兵)」 1940-44年頃



「戦地スケッチ(戦闘機)」 1940-44年頃



「戦地スケッチ(通信兵)」 1940-44年頃



「戦地スケッチ 泉溪鎮」 1944年



「戦地スケッチ 衡陽西站」 1944年



「戦地スケッチ 壠壕」 1944年



絵葉書「戦場」 1943年



絵葉書「北海道に於ける馬鈴薯の供出」 1944年



小川原脩
1911-2002

北海道・倶知安町生まれ。旧制中学(現・倶知安高校)で油彩を始める。東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科に入学。在学中に「納屋」(1933年)が帝展に入選。卒業後、福沢一郎らと出会い「エコール・ド・東京」「創紀美術協会」「美術文化協会」などの結成に参加。シュルレアリスム絵画への道を歩んだが、軍の規制が厳しくなり断念。その後、軍の命令により戦争記録画を制作。

戦後は郷里・倶知安に戻り、岩船修三、木田金次郎らと「全道美術協会(全道展)」の創立に参加。1958年、野本醇、因藤壽、穂井田日出磨らと「麓彩会」を創立。1975年、北海道文化賞受賞。1994年、北海道開発功労賞受賞。この年、小川原脩画集(共同文化社)を出版。

戦後、倶知安町に定住してから半世紀以上、新たな造形の可能性を求め続けたが、とりわけ70歳を目前にして訪れた中国、チベット、インドでの体験を契機として創作の新境地を拓いている。

●同時開催.....

第64回 麓彩会展

開催中～2023年2月26日(日)

小川原脩展「アジアの大地」

2023年3月4日(土)～7月2日(日)



小川原脩記念美術館
Shu Ogawara Museum of Art

〒044-0006 北海道虻田郡倶知安町北6条東7丁目1 (0136-21-4141)
<http://www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/>